

離脱概念の再考——コミュニティへの参入の保護性と害生成性

本学社会福祉子ども学科の相良翔准教授は、犯罪・非行からの離脱（Desistance）におけるコミュニティへの参加を、保護的側面と害を生みうる側面の双方から再検討し、その研究成果を公開した。

1. ポイント

- ・ 第三次離脱と第四次離脱に着目し、近年の離脱理論をコミュニティへの参加という観点から整理した。
- ・ コミュニティの承認・所属・安定という「保護的側面」と、同調・排除・語りの制約等の「害を生みうる側面」を区別した。
- ・ 離脱支援では、コミュニティとのつながりがどのような条件で保護、負担、害として働くかを検討する必要性を提起した。

2. 研究内容

犯罪・非行からの離脱（Desistance）研究では、犯罪行為の停止やアイデンティティの変化に加え、近年、他者からの承認・信頼・所属を伴う第三次離脱、過去を特別視されず「普通」に扱われることに着目する第四次離脱が提案されている。これらは離脱を個人の変化だけでなく、社会との関係から捉える重要な展開である。本稿は、この展開を踏まえつつ、コミュニティへの参加を無条件に望ましいものとみなすことに疑問を提起した。コミュニティは承認や安定を提供する一方、規範への同調、排除、語りの制約、責任の不可視化を生む場合もある。そこで「保護的側面」と「害を生みうる側面」を区別する枠組みを提示し、コミュニティへの参加がどのような条件で支援・負担・害として働くかを実証的に検討する必要性を論じた。

3. 用語解説

Desistance：犯罪・非行からの離脱を意味する用語である。

第三次／第四次離脱：第三次離脱は承認・所属、第四次離脱は過去を特別視されず「普通」に扱われることに着目する概念である。

4. 謝辞

本研究は日本学術振興会より助成を受けた〔助成番号 23K01816、26K05519〕。

5. 論文情報

掲載誌名：Deviant Behavior

論文タイトル：[Reconsidering Desistance: Community Entry and Its Protective and Harm-Generating Dimensions](#)

著者・所属：相良 翔・埼玉県立大学

6. 問い合わせ先

埼玉県立大学 保健医療福祉学部 社会福祉子ども学科

准教授 相良 翔

E-mail：sagara-sho@spu.ac.jp